

往復書簡 (前編)

岩手県で「馬場農園」を経営する馬場一輝さん。2013年に経営者となり、雪下になじんの栽培や産直を始めるなど、社員と一緒に日々試行錯誤しながら新しいことに取り組んでいます。

拝啓 高木 勇樹 様

この度、このような貴重な機会をいただきとてもありがたく思います。現在の私の考えが高木様にどのように捉えていただけたかを楽しみに、述べさせていただきます。

私は専業農家の長男として生まれましたが、中学まで一将来は農業がしたい「などとは全く思わず、高校もラグビー部があるからという不純な理由で工業高校に入学しました。ただ、進路相談のたびに、「父親や地域に認められた職業に選んだ出発点だったように思います。」

私が生まれ育った地域は、開拓農村の地域だったこともあり、周りは農家が多く、兼業農家を含め農業に関連する仕事をしている人が多くいました。その中で、父は地域の中心的な人物で、子供の私から見ても、よくもそんなに農業経営や地域の大事な役をいっていることができるものだなと思いました。また、そういった父が、文句を言いながらも生き生きしているように見え、周りから信頼されているから大事な役を任されているのだと感じていました。いつか私もそんな存在になりたい、父親や地域に認められたいと思うようになっていったのは自然な流れだったと思います。

また、自分で事業を始めると、「関わるお客様」にも認められたいとの欲が出てきて、食品加工工場や産直、飲食店に直接納品するようになりました。お客様と近い関係になることで、お客様の要望を知って、それを生産に活かすこともできます。

私は高校時代に様々な職業を模索しましたが、大変ながらも自分たちの技術力の向上次第で農産物の品質や収量が良くなる農業を「職業」としてみたく、農業は魅力的でやりがいのある仕事だと感じるようになり、農業の世界に入りました。そして、働く中で「やりがいのある仕事(農業)」という点で、両親とは別の考えが生まれてきました。先代までの農業は、家族経営でどこまでできるかに挑戦する農業でした。収益性などを考えると、当時としてはかなり最適化できていたと思いますが、継続性やお客様が求める定時、定量、定品

質、定価格に応えるという点では、個人レベルでは限界があります。

そのため、私が考える農業では、組織的な農業は絶対条件であり、また組織づくりを進めるならば、志を持った、自分と同世代の人たちと一緒に働きたいと思うようになりました。今は、家族従業員5人と正社員4人で、どのようにしていけば現状をもっと良くできるか日々考えながら仕事をしています。

近年、私の地域では、農地の価格が年々下がっています。それだけ農地や農業の価値が落ちてきていることだと思います。

常々、身の丈に合った経営をしていかなければと考えていますが、人を育てること、設備投資や資金調達のことなどは先を見据えて準備がなされていなければ始めることもできません。そのため、10年以内に300ha〜1000haの規模を経営することを想定して、今から手を打っておかないと間に合わなくなるのではないかと心配しています。今はまだ、自分がそのような規模の経営者になるとは全く想像もつきませんが、どのような考え方でやっていけば進む道筋が見えるのか、ワクワクしながら考えているところです。

高木様は今後の土地利用型農業がどのように進んでいくとお考えでしょうか。農業は魅力的な仕事なのに、活かせる環境が整っていないことで農業の価値が落ちている現状がもつたいたない気がしてならないのです。

平成28年7月吉日

馬場 一輝(ばば かずき)

1985年 岩手県 生まれ

2008年 農業者大(東京都多摩市)卒業後、親元就農

2013年 先代から経営移譲され経営者となる

2014年 農業生産法人クレアクローズ株式会社設立 代表取締役就任

小菊やレタスなどのほか、紫になじんや白になじんなど希少品種の生産にも取り組む。馬場農園のになじんと近隣の農家のりんごで作った「になぶる」(になじりんごジュース)の販売も行う



【前列右が馬場さん】

敬具

拝復 馬場 一輝様

夏大好きの小学生もこのところの猛暑続きで少々げんなりです。

天候を友とする馬場農園の皆さんには大忙しの日々をお過ごしのことと存じます。

親の背中をみて子は育つと申しますが、貴兄は正に、黙々と農作業をこなし、地域の重要な仕事を立派に成し遂げ、地域の人望を得ていた父親を師として、自らの人格形成・将来設計を自然としていたのです。

だから、ラグビーをしたり、好きなことをしたりしながらも、進路相談のたびに、貴兄の血となり肉となつていた、正に身につけていた考えが自然と農業という職業を最終的に選択させたのだと思います。

就農後わずか5年で経営を移譲されていることにも貴兄の実力のほどがわかります。

農業を魅力的なやりがいのある仕事と感ずるようになった理由として、自分たちの技術力の向上次第で品質や収量が良くなるという点をあげておられます。

加えて、収益性を含め、経営の継続性やお客様の求めに応ずる、これはマーケティング、顧客目線で生産すると同義、という点が重要と指摘されております。

農業が産業として成り立つためのキーワードは自らの技術力をはじめとする経営資源を創意工夫努力によりフル活用し、需要に応じた生産を通じて収益をあげ、持続する経営をすることだと私は常々考えています。が、貴兄の取り組みはこれに合致していると思います。

ただ、常に忘れていけないのは、自分は両親そして祖先をはじめいろいろなひとと環境に生かされて存在しているということ。また、もうひとつ徒然草の中の言葉だっと思えますが、「先達はあらまほしき」です。折角生きた手本が目の前にあるのですから、ご両親の家族経

営の分析・検証を今一度してみてください。貴兄の10年以内の道筋に必ず参考になります。

農地が下がっているということですが、その価格は収益還元価格になつているでしょうか。組織は、一度雇用すると人員整理ができないなど硬直的な面もあります。組織的な農業は絶対条件ということですが、人件費をはじめ固定経費ほどの程度と見込んでおられるのでしょうか。

300ha〜1000haの土地利用型農業は十分可能だと思いますが、作付予定作物、圃場のまとまりはどう考え、それに必要な人員、機械設備、所要資金、売上見込、予想経費などはどう見込むのか、次回大雑把な試算をお示し頂けるとより具体的な話ができます。

農業の魅力を活かせる環境が整っていないことは私も認めますが、それを変えるのは決して国などの他力ではなく、貴兄方が実践を通じて成功モデルを示すことだと思いますし、私から見ればみなさんや諸先輩の努力で農業の価値はかつてないほど上がってきていると思います。

平成28年7月吉日

敬具

高木 勇樹 (たかぎ ゆうき)

1943年 群馬県生まれ

1966年 東京大学法学部卒業後農林省入省。食品流通局砂糖類課長、大臣官房企画室長などを経て、食糧庁管理部長、畜産局長、大臣官房長、食糧庁長官などを歴任

1998年 農林水産事務次官、2001年退官

2002年 榊林中金総合研究所理事長

2003年 農林漁業金融公庫総裁、2008年同公庫退任

2007年 NPO法人日本プロ農業総合支援機構副理事長

現在、NPO法人日本プロ農業総合支援機構理事長などの立場から、わが国農業・農村の活性化、食の問題の解決に向けた活動に尽力

